

キタキツネのキキ

4

作 なかむら よしひろ

キキたちは人や車に慣れるにつれ、

おうちから離れずと遠くまで行くようになりまし。その日も2匹は並んで散歩に出かけました。10分ほど歩いたところに湖を見渡す展望台がありました。

道路をわたって駐車場に行くとカラスが3羽、ナイロンの袋をしぎりに突っついていきます。キキたちが近づくとカラスはさつと飛び立って近くの枝にとまりました。二匹がその袋に鼻を近づけると、とてもおいしそうなおいがしました。

「お兄ちゃん、これいいにおいがするよ」

キキもクンクンかいでみました。これまで人にもらったお菓子とはちがういいにおいです。2匹は夢中になってナイロンの袋にかみついたり、足でひっかいたりして、ようやく中身を引っぱり出しました。

それは観光客が食べ残したお弁当で、とりの唐揚げや卵焼きやかまぼこが入っていました。どれもこれまで食べたことのないものでしたが、みんなおいしくて、むがむちゅうで食べてしまい、さいごはお弁当の入っていた箱までべろべるとなめました。それほどおいしかったのです。木の上ではさつきのカラスたちがうらめしそうに2匹がお弁当を食べるのを見ていました。

キキと二匹はこれにすっかり味をしめて毎日その展望台まで行きました。2匹は人気者でした。彼らが行くと必ずと言っていいほど写真にとる人がいました。お昼頃には観光客がお弁当を食べていて、そんな人は残りものではなく自分の食べているお弁当のおかずをくれることもすぐに見えました。

でも中にはこんな人もいました。キキがなにかをくわえている人がいたので近づくと、その人はそのくわえていたものをキキの前に投げました。キキは喜んでそれに飛びついたのですが「ギャツ」とひめいをあげて吐き出しました。それは火のついたタバコだったのです。舌がヒリヒリして口の中にいやな苦い味が残っています。キキはいちもくさんにおうちにかけて帰りました。そしてそ

のあとは2度とタバコを吸っている人には近づかないようにしました。

6月のあたたかい日のことでした。キキはひとりで散歩に出かけました。その日は少し冒険してみようと山の上の方に登ることにしました。おうちのまわりにはない大きな木や石をよけてゆつくり歩いていきました。これまで通ったことのない道で、きいたことのない音を聞き、かいだことのないにおいをかぐのは少し恐かったのですが「ぼくはもう大きいのだから、何でもないや」と自分に言いきかせ、がんばって歩きました。15分ほど登ったときです。突然目の前にキキの倍ほどもある大きなキツネが現れました。一体どこから来たのかまったくわかりません。キキはおどろいて思わず逃げ出そうと体の向きを変えたのですが、そのキツネはキキをとびこえ行く手をふさぎました。

「誰だ、おまえは。見たことのない顔だな」とそのキツネは言いました。「ぼくはキキ、君はだれ」キキは恐るおそるききかえました。「おれ様か、おれはトトってんだ。おまえはこの辺がおれ様のなわばりってことを知らないのか」「なわばりって、なに」「なんだ、なわばりを知らないのか」

おまえはいつたどこに住んでんだ」

「ずっと下の方の道路のちかく」「ああ、道路わきの側溝に住んでいるあの一家か、うわさには聞いたことがある。じゃあおまえはこの春に生まれた子どもだな」「うん、そうだよ、今はそこから引越したけど」どうやらトトは悪いキツネではなさそうです。キキは少し落ちついて、

「それでなわばりって、なに」と聞きました。「なわばりってのはな、えものをとる場所のことだ」「えものって、なに」「おまえ、えものも知らないのか、一体なにを食って生きてんだ」今度トトがおどろく番でした。「えものってのはな、食べもののことだ」「なんだ、食べもののことか、それなら道ばたに座っていれば人間がくれるよ」

「なんだって、お前は人間から食べ物をもらっているのか。そんなことをしていると死んじゃうぞ」とトトが大きな声で言いました。
(1月号へつづく)